

『きみの手をたずさえて』

著:淡路 水

ill:明神 翼

「マジか」

用事のついでだからと午前中に立ち寄った稔がリンゴの皮を剥(む)きながら千明の話を聞いていた。一口に切ったリンゴをフォークに刺して「ほら」と差し出す。

なぜリンゴ？ と千明が訊いたら、「入院患者にリンゴを剥いてやるのが夢だった」とわけのわからない返事を寄越されて千明は首を傾げた。なんでも昔のマンガやドラマでの入院といえばリンゴ、というシーンを見て憧れていたらしい。稔のやることはときどきおかしい。でもリンゴはとても美味しかった。

「うん。もう三日も来ていない。その前は続けざまに来てたんだけど」

サクサクとした歯触りのリンゴをもぐもぐ咀(そ)嚼(しゃく)しながら答える。

「つか、成川センセ本気かあ」

へえ、と稔はにやにや笑う。

「信じられないだろ」

はい、と食べ終わったあとのフォークを返す。

「まだ食う？」

「いや、もういらない」

「ん。じゃ、おれ食おう。っていうかさあ、熱いね。熱い。若いなあ。まあそんくらいの方がおまえには合ってると思うから、おれとしては成川先生に頑張ってもらいたいところだけど」

「やめてくれよ。だいたいおれみたいな男相手に何血迷ってんだよ、って話だって。おれは誰かの将来に影響するような人生送りたくないんだって。あとからおれのせいにされても困るし」

今度は稔がリンゴを嚙(かじ)りながら千明の顔を見た。

「それはおまえが間違えたから？」

それを言われるとぐうの音も出ない。

稔はまた一口リンゴを嚙る。サク、という音がやけに響いた。

「……そうだよ」

苦々しげに呟く。

「だけどさ、それは、それこそ先生が言うとおりの人だって大人なんだから、わかってることだろう？ おまえだって澤井さんとのことは自己責任だってわかってるじゃないか。人が人を好きになるのは、誰のせいでもなくて自分の問題だろうが。誰が誰に血道をあげようとき、好きになったらしょうがないんじゃないの。もう」

「でも……」

「あきらめましたよ、どうあきらめた、あきらめられぬとあきらめた」

千明の濁した言葉を続けるように稔が唄うような節回しで言う。

「なにそれ」

「都(ど)々(ど)逸(いつ)」

「都々逸……。そりやまた渋いとこ……」

「あのさ、人の心には誰も干渉できないわけよ。だろ？ おまえにだって覚えがあるはずだ」

鋭いところを突いてくるなと千明は押し黙る。

覚えがあるからだ。あるからこそ——わき目もふらずその人だけを見ていた結果が、今この自分だからこそ。

「おまえの気持ちもわかるけど、あんまり頑(かたく)なでも先生が可哀想じゃないの。せっかくおまえのためにと思ってるのに」

「だからそれが……！」

余計なお世話だ、そう言おうとしたとき稔は新しいリンゴを刺したフォークを千明の口に押しつけた。

千明は物理的に口を閉ざされる。

「好きなくせに」

稔が呆れたように息をつき、そして続けた。

「千明がそんなに取り乱しているのって、結局先生のことを気になってるからだろ。おまえって人間をよく知ってる身からすると、本当にどうでもいい相手だったら全然気にもとめないのになんでそんなにムキになってるわけ」

「それはだっておれが原因で就職とか、そういうのに関係するかもって思ったから」

「なんでおまえがそこまで先生のこと心配しちゃうの。あの人が勝手にやってることなのに。そうやって中途半端に心配してるから先生だって期待すんだろうが」

醒めた目を向けられる。

「……………」

何も言い返せなかった。

成川が自分のためだと思うと、いてもたってもいられなくなる。心がかき乱されてぐちゃぐちゃになってしまう。

彼がルールを踏み外してしまうのが怖いのだ。

「ごめん、言い過ぎた」

ぼんやりしている千明からフォークを取り返し「今日は帰る」と言って、稔は立ち去った。

千明は毛布を被ってベッドの中で丸くなる。

好きになるのが怖い。好きになりたくない。昔のようにあんなにも周りが見えなくなるほど、恋に溺れなくなかった。

だからこそ成川の真っ直ぐで熱い目が怖い。

自分だけに向けられる気持ちが怖い。怖くて、震えるくらい——嬉しい。

だけど恋してはいけない。恋をしたら、彼を好きになってしまえば、彼の道を違(たが)えてしまいかねない。

——好きになんかならない。

稔が帰ってしまったあと、突然千明のベッドが移動させられることになった。

前日に入院した患者の精神状態が不安定なため、入り口すぐのベッドでは廊下の物音や、人の出入りにも過敏に反応してしまうだろうとの判断で、千明に「替わってくれないか」と看護師から言われた。

今の千明は入院生活に慣れていたし、特に窓際にこだわりがあるわけではない。

了承するとすぐにベッドの移動が行われた。

入り口近くという位置になって、これまでとはまるで感覚が異なっていることに驚いた。

これまでのベッド位置からはたった数メートルなのに、聞こえる物音の大きさも種類も全然違う。

これでは神経の細かい人は落ち着かないだろうなと千明は納得する。

「ごめんなさいね」

看護師が移動させたロッカーの荷物を整えながら、しきりに謝っていた。

「大丈夫ですよ。こっち側も新鮮で」

そう答えたとき澤井が千明の前に現れた。数日ぶりだ。あきらめてくれたかと思っていたがそうではなかったらしい。がっかりした気持ちになる。

「場所移ったのか——あ、ちょっと安藤さんに話があるから外してくれないかな」

看護師は澤井の言葉に「じゃ、あとでまた不都合なところあったら直しにきますから」と言い、出て行ってしまった。

「千明、退院後なんだが」

「……退院後って」

「千明は退院してもしばらくはまだ様子を見なくちゃいけないから、わたしのところにいればいい」

言っている意味がまるで理解できない。何を言っているのか、この人は。

「何を言っているのかわかりませんが」

澤井の笑顔にゾツとする。

「何って、きみはひとり暮らしだろう？ ひとりでいて何かあったら大変だからわたしが面倒を見てあげるって言ってるんだよ」

千明の髪の毛に澤井は指を絡(から)ませる。ぞわぞわとした嫌悪感が背筋を這い上がってきた。吐きそうになるのを堪(こら)え、息を飲む。

「澤井さん、これを言うのも何回目かですけれど、おれはあなたと別れると一年前に言ったはずですよ」

「ああ、そんなことも言っていたね。それがどうかした？ それより早く返事が欲しいんだが。こっちの都合もあるしね」

千明の思惑とはまったく異なるところで澤井は話を進めている。どうやら何を言っても彼には伝わらないらしい。

つ……、と髪の毛を絡ませていた澤井の指先が頬に伝う。千明は緊張に身体を硬くさせ息を詰めた。

「どうした？ 千明、返事して？」

頤を持ち上げられて、返事を強要する澤井に空恐ろしいものを覚えた。逃げられないのか。どうあっても。

そのときパタパタと忙しない足音が聞こえた。

「安藤さん？ ……千明さん？」

千明のベッドの前を通り過ぎ、窓際のベッドへ向かって怪(け)訝(げん)そうに名前を呼ぶ声が聞こえた。成川だ。いつものベッドに千明がいないのをおかしく思ったのだろう。

「先生、こっちです」

半ば助かった、と思いながら千明は成川を呼んだ。

成川は「ここですか？」と言いながら、カーテンを引く。

「いないからびっくり——」

成川の表情が変わる。千明に見せる少し甘える表情はなりを潜め、苦いような複雑な笑みを浮かべた。

同時に澤井の顔も陰を含んだものになる。

「それじゃあわたしはこれで。きちんと考えた上で返事を」

澤井はちら、と成川を横目で睨みつつ、そのまま横をすり抜けて去っていった。

千明は小さく息を吐く。とりあえずこの場を切り抜けられたと安堵した。

「大丈夫ですか？ 何もされていない？」

「大丈夫。こんな入り口近いところじゃいくらあの人だって何もできないって」

本当は少し困っていたのは内緒にしておく。言えば余計に憤慨するだろうし、妙な悪戯も今日はされていない。

こうなってみると、入り口側にベッドを移してもらったのは正解だったといえる。窓側ではナースステーションまでは声が届かない可能性があるが、ここからなら大声を出せば、ナースステーションの誰かの耳には届くだろう。

「そうかもしれませんけれど。本当に何も？」

「ああ。退院後、一緒に住もうって言われたくらいかな」

「は？」

鳩が豆鉄砲を食(くら)ったような顔をしている。成川のこんなきょとんとした表情は初めてかもしれない。それがとてもおかしくて、思わず笑いが漏れる。

「わけわかんないだろ」

「笑ってる場合ですか。わかりませんよ！ 一体どういうつもりでそんなことを」

「さあ？」

「さあって……他(ひ)人(と)ごとみたいに」

「退院後のことはきみには関係ないだろう？ それに平気だって。のこのこあの人のところになんか行かないから」

おどけた言い方でひらひら手を振りながら言うと、いきなりその手を掴まれる。

「……っ」

なに、という間もなく、開きかけた唇に成川は唇を押しつけ、貪る。

下手くそなキスだ。ただの身勝手な。息が止まりそうになって、鼻で息をしようと空気を吸い込むと、鼻腔に成川の匂いを感じた。

いつもより、ずっと強く感じる。

忙しいのだろう。風呂もろくに入れておらず、多分、こんなところに来ている間も惜しいくらいなのに違いない。

——おれのために。

そう思うとこわばっていた唇が綻(ほころ)ぶ。唇の隙間から入り込む舌を受け入れて、

千明は成川の首に手を回した。

「……ん……は……あ……」

舌を絡ませ、吸い、唇を食(は)む。何度も何度も角度を変えて、口づけた。

「……どうしたんですか」

息継ぎの合間、「いいの？」と戸惑った瞳で成川が千明を見つめる。

「どうもしない。キスしたくなっただけ。それともしたくなかった？」

そう言いながらも上目遣いで誘う。

自分の気持ちの所在は明らかにしない。曖昧なままにしておく方がいい。それでも今は彼とこうして、ただキスをしていたい。

——好きだ。

多分自分は彼を好きなのだと思う。稔が前に指摘したように。だけれどもけっして認めたくなかった。今だってできれば自覚したくない。

だから——好きだなんて、言わない。

この気持ちはキスと一緒に融かしてしまうから。そうしたら誰にもこの気持ちはわからない。

千明は成川の唇へ自分の唇を重ねた。

本文 p102～112 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>